

## 『正法眼藏抄』口語訳の試み

——仏 性 (上) ——

伊 藤 秀 憲

第十四段

長沙景岑和尚の会に、竺尚書とふ、「蚯蚓斬レテナル為ニ兩段」、兩頭俱動、未審、仏性在ニ阿那箇頭。」師云、「莫妄想。」書云、  
「争イカガゼン奈動タバ一何。」師云、「只是風火ノダ未ルナリ散ゼ。」<sup>(1)</sup>

いま尚書いはくの蚯蚓斬為兩段は、未斬時は一段なりと決定するか。仏祖の家常に不恁麼なり。蚯蚓もとより一段にあらず、蚯蚓きれて両段にあらず。一両の道取、まさに功夫参考すべし。兩頭俱動といふ兩頭は、未斬よりさきを一頭とせるか、仏向上を一頭とせるか。兩頭の語、たとひ尚書の会不会にかかるべからず。語話をすつることなれ。きたる両段は一頭にして、さらに一頭のあるか。その動といふに、俱動といふ、定動智抜ともに動なるべきなり。

未審、仏性在阿那箇頭。仏性斬為兩段、未審、蚯蚓在阿那箇頭といふべし。この道得は審細にすべし。兩頭俱動、仏性在阿那箇頭といふは、俱動ならば、仏性の所在に不堪なりといふか。俱動なれば、動はともに動ずといふとも、仏性の所在は、そのなかにいづれるべきぞといふか。

師いはく、莫妄想。この宗旨は作麼生なるべきぞ。妄想することとなれといふなり。しかあれば、兩頭俱動するに妄想なし。妄想にあらずといふか、ただ仏性は妄想なしといふか、仏性の論におよばず、兩頭の論におよばず、た

だ妄想なしと道取するかとも参究すべし。動ずるはいかがせむといふは、動すればさらに仏性一枚をかさぬべしと道取するか、動すれば仏性にあらざらむと道著するか。<sup>(3)</sup> 風火未散といふは、仏性を出現せしむるなるべし。仏性なりとやせむ、風火なりとやせむ。仏性と風火と、俱出すといふべからず、一出一不出といふべからず。風火すなはち仏性といふべからず。ゆへに長沙は、蚯蚓に有仏性といはず、蚯蚓無仏性<sup>(4)</sup>といはず、ただ莫妄想と道取す、風火未散と道取す。仏性の活計は、長沙の道をト度すべし。風火未散といふ言語、しづかに功夫すべし。未散といふは、いかなる道理がある。風火のあつまれりけるが、散すべき期いまだしきと道取するに未散といふか。しかあるべからざるなり。風火未散はほとけ法をとく、未散風火は法ほとけをとく。<sup>(5)</sup> たとへば、一音の法をとく時節到来なり。説法の一音なる<sup>(6)</sup>、到来の時節なり。法は一音なり、一音の法なるゆへに。又、仏性は生のときのみにありて、死のときはなかるべしとおもふ、もとも少聞薄解なり。生のときも有仏性なり、無仏性なり。死のときも有仏性なり、無仏性なり。風火の散未散を論ずることあらば、仏性の散不散なるべし。たとひ散のときも仏性有なるべし、仏性無なるべし。たとひ未散のときも有仏性なるべし、無仏性なるべし。しかあるを、仏性は動不動によりて在不在し、識不識によりて神不神なり、知不知に性不性なるべきと邪執せるは外道なり。無始劫來は癡人おほく識神を認じて仏性とせり。本来人とせる、笑殺人なり。さらに仏性を道取するに、挖泥滯水なるべきにあらざれども、牆壁瓦礫なり。向上に道取するとき、作麼生ならむかこれ仏性。還委悉麼。三頭八臂。

### 正法眼藏仏性第三

爾時仁治二年辛丑十月十四日、在<sub>ニ</sub>雍州觀音導利興聖寶林寺<sub>ニ</sub>示衆。

此問答打任テ人ノ心得タル様ハ、蚯蚓ハニニ切タリ、両方俱ニ動スル上ハ仏性ハキルヘキニアラネハ、一方ニ付テアルラム、其上ハ何方ニアルソト不審タル様ニ文面ハ見タリ、

この問答は、普通一般に人が理解している様は「次のようにであろう。」「蚯蚓は二つに切つてしまつた。両方がともに動くからには、仏性は切ることができるものではないので、一方に付いているであろう。そうであるからには、どちらの方にあるのかと、疑つてているように「この」文面は読めた」と。やはり大抵このよ

又多分如レ此被ニ心得一ヌヘシ、若如レ此イハハ自レ初談ツル仏性ノ義皆違ヌヘシ、又非ニ祖師仏法一正師ニアハス審細ニ參学セサルカ所レ致ナリ、先仏法ニ兩頭ト云両段ト云、又動ト云不動ト云、乃至蚯蚓ノ様、斬不斬ト談スル様ヲ、能能可ニ決定一事也、其上ニイマノ問答ハ可レ明事也、(二三七b)

蚯蚓斬為両段ハ未斬時ハ一段也ト決定スルカ、仏祖ノ家常ニ不恁麼也文、斬為両段ト云ニ付テ、未斬時ハ一段也ト決定スルカトハ被レ云也、但今ノ心地、蚯蚓ヲ普通ノ蚯蚓ト心得テ、斬不斬ヲ疑ニハアラス、今ハ已ニ以ニ蚯蚓ニ為ニ仏性、以ニ仏性ニ為ニ蚯蚓ニユヘハ、以ニ蚯蚓全体一段トモ両段トモ可レ談故ニ、奥ニハ仏性斬テ為ニ両段ニ未審仏性在阿那箇頭トハ被レ決也、打任テ不レ斬時ヲ一段ト決定セハ、同ニ凡見ニ所ヲ仏祖ノ家常ニ不恁麼也トハ被レ釈ナリ、(二三八a)

両頭俱動ト云両頭ハ、未斬ヨリサキヲ一頭トセルカ、仏向上ヲ一頭トセルカ文、仏向上ト云ハ、仏性ヲ一頭トセルカト云程ノ心地ナリ、仏向上ト云ヘハトテ、仏ノ上ニ又モノノアラムスルヲ談セムスルトハ不可ニ心得一ヌ

うに理解されるにちがいない。もしこのように言うならば、「この巻の」初めから説いた仏性の意味は、皆相違することになろう。また「それは」祖師の仏法ではない。正師に会わず、詳細に参学しない者が言うことである。先ず、仏法で「両頭」と言い、「両段」と言い、また「動」と言い、「不動」と言い、或いは「蚯蚓」の様、「斬・不斬」と説く様を、よくよくはつきりと決めるべきである。その上で、この問答は明らかにすべきである。

「蚯蚓斬為両段は、未斬時は一段なりと決定するか。仏祖の家常に不恁麼なり」。「斬為両段」(斬れて両段と為る)ということに関して、「未斬時は一段なりと決定するか」と言われるのである。ただし、この意味あいは、「蚯蚓」を普通の蚯蚓と理解して、斬・不斬を疑うのではない。ここでは、既に蚯蚓を仏性とし、仏性を蚯蚓とするわけは、蚯蚓全体を「一段」とも「両段」とも説くべきであるから、後には「仏性斬為両段、未審、蚯蚓在阿那箇頭」(仏性斬れて両段と為る、未審、蚯蚓は阿那箇頭にか在る)と決められるのである。普通一般に、もし斬らない時を「一段」とはつきりと決めるならば、「それは」凡夫の見解と同じであるところを、「仏祖の家常に不恁麼なり」と釈かれるのである。

「両頭俱動といふ両頭は、未斬よりさきを一頭とせるか、仏向上を一頭とせるか」。「仏向上」というのは、「仏性を一頭とせるか」というほどの意味あいである。「仏向上」というからといって、仏の上にまたものがあるようなことを説こうとすることとは理解してはいけない。ただ、結局、仏を指して「仏向上」と言うのである。「尚書の会不会にかかるべからず。語話をすつることなかれ」と

所詮仏ヲ指テ云「仏向上」也、尚書ノ会不会ニカカハルヘカラス、語話ヲスツル事ナカレ云云、尚書ハタトヒ心得テモイヘ、又不<sup>ニ</sup>心得モアレ、此語話ヲハ、仏祖ノ道理ニイタツラナル詞ニニセテステス可<sup>ニ</sup>心得<sup>ト</sup>也、

ソノ動ト云ニ、俱動ト云フ、定動智<sup>ト</sup>モニ<sup>也</sup>（二三八b）動ナルヘキ也云云、打任<sup>テ</sup>教ニ定動知<sup>ト</sup>テ、以<sup>レ</sup>定動カシテ以<sup>レ</sup>智<sup>ト</sup>云フ、是ハ能所各別ナリ、又動拔相対セリ、今ハ動ナルヘクハ全体動、拔ナルヘクハ全体拔也、故定動智拔共ニ動ナルヘキ也トハ云ハルルナリ、是モ案<sup>シ</sup>スルニ定是仏性也、動同仏性也、智又仏性、拔是仏性也、然者以<sup>ニ</sup>仏性<sup>一</sup>ウコカシ、以<sup>ニ</sup>仏性<sup>一</sup>拔トモ心得ヌヘシ、所詮此段ノ落居ハ、仏性斬為兩段、未審、蚯蚓在<sup>ニ</sup>阿那箇頭<sup>一</sup>也ニテ、分明ニキコユルナリ、

両頭俱動、仏性在阿那箇頭トイフハ、俱動ナラハ、（二三九a）仏性ノ所在ニ不堪<sup>カズ</sup>也ト云カ、俱動ナレハ、動ハ共ニ動スト云トモ、仏性ノ所在ハ、ソノ中ニイツレナルヘキソト云カ云云、如<sup>レ</sup>文可<sup>ニ</sup>心得<sup>一</sup>、動ハ共ニ動スト云フトモ、仏性ノ所在ハ、其中ニ何ナルヘキソト云カト云ハ、一方ハ不<sup>レ</sup>動一方ハ動セハ、此

ある。「尚書」は、たとえ「[両頭]の語を」理解して（会）も言いなさい。理解しない（不会）「で言う」こともある。この「語話」を仏祖の道理に無用のことばのようにして捨てないで、理解すべきであるというのである。

「その動といふに、俱動といふ、定動智抜ともに動なるべきなり」とある。普通一般に、教家では「定動智抜」と言って、「定を以て動かして、智を以て抜く」と言う。これは能所各別である。また、「動」と「抜」が相い対している。ここでは、もし「動」であるならば全体が「動」、もし「抜」であるならば全体が「抜」である。だから「定動智抜ともに動なるべきなり」と言われる所以である。これも思ひめぐらすに、「定」は仏性である。「動」も同じく仏性である。「智」もまた仏性であり、「抜」も仏性である。だから、「仏性を以て動かし、仏性を以て抜く」とも理解できよう。結局この段の落ち着くところは、「仏性斬為兩段、未審、蚯蚓在阿那箇頭」によつて、はつきりと得心できるのである。

「両頭俱動、仏性在阿那箇頭といふは、俱動ならば、仏性の所在に不堪なりといふか。俱動なれば、動はともに動ずといふとも、仏性の所在は、そのなかにいづれなるべきぞといふか」とある。文の通りに理解すべきである。「動はともに動ずといふとも、仏性の所在は、そのなかにいづれなるべきぞといふか」というのは、一方は動かず、一方は動くならば、この疑問もあるはずがない。動く方に仏性はあるとはつきりと決めるべきである。「両頭俱動」するからには、仏性があるとは決してあるものではないので、どちらに付いて仏性はあるであろう

不審モアルマシ、動スル方ニコソ仏性ハアリト可ニ決定、両頭俱動スル上ハ、仏性カ斬テ両方ニナルヘキ物ニアラネハ、何方ニ付テ仏性ハアルヘキソト心得ラレヌヘシ、此見返返白見ナリ<sup>(10)</sup>、可ニ棄置<sup>キチ</sup>見ナリ、ココニ、師曰莫妄想、コノ宗旨ハ作麼生ナルヘキソ、(二三九b) 妄想スルコトナカレト云ナリ、此答蚯蚓ノ斬不斬、両頭一段、仏性ノ所在等ノ詞ヲ只凡情ニ心得テ、皆仏祖ノ所談ニ違スル所ヲ指テ、莫妄想ト被<sup>レ</sup>仰タル様ニ聞ユ、又此定ニ被<sup>レ</sup>心得ニスヘシ、カク談セハ取捨分別法ニ混合シツヘシ、非<sup>レ</sup>爾、只仏性ノ姿カ莫妄想ニテアルナリ、乃至蚯蚓ノ当体、両頭俱動カ、莫妄想トハ云ハルルナリ、努努見解ノアシキヲ被<sup>レ</sup>嫌トハ不可ニ心得ハ、喻ヘハ諸惡莫作ヲ心得ルニ不可<sup>レ</sup>違、所詮仏性ヲ重テ被<sup>レ</sup>示詞也ト可ニ心得ハ、故祖師ノ仏法ハ一言半句(二四〇a) モ空シキ詞ナキ也、雖<sup>レ</sup>相<sup>ニ</sup>似<sup>タ</sup>世間詞<sup>イエトモ</sup>、皆<sup>アラハス</sup>顯<sup>ニ</sup>仏法道理<sup>也</sup>、実ニ<sup>ラバアムスル</sup>情<sup>案</sup>ニ仏性ナラヌ法、仏性ナラヌ時刻力片時モアルヘカラサル上ハ、妄想何所ニ置テカ<sup>キフヤクアムスル</sup>棄不棄<sup>ノ</sup>道理アラム、仏性ノ千変万化スル道理也、シカアレハ、両頭俱動スルニ妄想ナシ、妄想ニアラスト云カ、乃至両頭ノ論ニ不<sup>レ</sup>及、只妄想ナシ

と、「竺尚書の問は」理解できよう。この見解は、何度も考へてもかたよつた見解である。棄ておくべき見解である。ここに、「師いはく、莫妄想。この宗旨は作麼生なるべきぞ。妄想することなかれといふなり」「とある」。この答は、蚯蚓の斬・不斬、両頭・一段、「仏性の所在」等のことばを、ただ凡夫の考へで理解して、すべて仏祖が説くところをさして、「莫妄想」とおっしゃられたように聞こえる。また、このように理解されよう。このように説くならば、取捨分別の法と混同しているにちがいない。そうではない。ただ仏性の姿が「莫妄想」であるのである。或いは蚯蚓の当体、「両頭俱動」が「莫妄想」と言われる所以である。決して見解の正しくないのを斥けられるとは理解すべきではない。例えば、「諸惡莫作」<sup>(11)</sup>を理解するのと違うはずがない。結局、仏性を、重ねて示されたことばと理解すべきである。だから、祖師の仏法は一言半句も無駄なことばはないのである。世間のことばによく似ていると言つても、皆仏法の道理を表すのである。實に、よくよく考へるに、仏性でない法、仏性でない時刻が片時もあるはずがないからには、「妄想」をどこにおいて、棄てる、棄てないの道理があるのである。妄想なし。妄想にあらずといふか、「ただ仏性は妄想なしといふか、仏性の論におよばず」、両頭の論におよばず、ただ妄想なしと道取するかとも参究すべし」とあるのは、いざれもこのようない道理があるにちがいないところを、「……いふか、……いふか」とあげられるのである。この意味<sup>(12)</sup>あいは、所々に多くあげられるのである。「説似一物即不中」の道理に皆同じである。「動するはいかがせむといふは、動すればさらに仏性一枚をかさぬべしと道取するか」。「動」を「仏性」と理解するところを、仮りに「仏性一枚をかさぬ」と理解すべきか。「動すれば

ト道取スルカトモ参究スヘシトアルハ、イツレモカカル道理ハアリヌヘキ所ヲ、イフカイフカトハアケラルルナリ、此心地所所ニ多被<sup>レ</sup>舉也、説似一物即不中ノ道理ニ皆同ナリ、

(二四〇b) 動スルハイカカセムト云ハ、動

スレハサラニ仮性一枚ヲカサヌヘシト道取スルカ文、動ヲ仮性ト心得ル所ヲ、釐仮性一枚ヲカサヌトハ可ニ心得ニ歟、動スレハ仮性ニアラサラムト道著スルカトハ、動ヲハ動ニテ仮性トハイハシト云心ナリ、猶動与ニ仮性ニカ各別ナル様ニキコユル所ヲ、セメテモ親切ニ心得エム料也、

師曰、風火未散ト文、是又五大和合シテ出生ス、シカアルニ両頭動スル上ハ、風火未散ナル条顯然也ト被<sup>レ</sup>仰様ニ被<sup>レ</sup>心得ニスヘシ、邪見也、今ノ風火ハ何物ソ、仮性ナルヘシ、然者散未散何所ニカ(二四一a)可<sup>レ</sup>置、以<sup>ニ</sup>此道理「風火未散トハ被<sup>レ</sup>示也、サレハ仮性ヲ令ニ出現<sup>レ</sup>ナルヘシト被<sup>レ</sup>釈<sup>レ</sup>之、イクタヒモ只カサネカサネ仮性ヲ被<sup>レ</sup>示詞ト可ニ心得ニナリ、仮性也トヤセム、風火也トヤセム、仮性ト風火、俱出トイフヘカラス、一出<sup>レ</sup>不出ト不可<sup>レ</sup>云、風火則仮性ト不可<sup>レ</sup>云、ユヘニ長沙ハ、蚯蚓ニ有仮性トイハス、蚯蚓無仮性ト

仮性にあらざらむと道著するか」とは、「動」を「動」として、「仮性」とは言わないという意味である。それでも「動」と「仮性」とが異なっているように聞こえるところを、何としてもぴたり一つであるように理解しようとするためである。

「〔師云、「只是」風火未散〕」とある。これはまた、「あらゆるものは、地水火風空の」五大が和合して生まれ出る。そうであるから、両頭が動くからには、「風火未散」であることは明らかであるとおっしゃられたように理解されよう。「だがこれは」邪見である。この「風火」は何物か。仮性であろう。そうであるならば、散・未散はどこに置くべきであるのか。この道理によつて「風火未散」と示されるのである。そうであるから「仮性を出現せしむるなるべし」と釈かれるのである。何度もただ重ねがさね仮性を示されることばと理解すべきである。

「〔仮性なりとやせむ、風火なりとやせむ。仮性と風火と俱出すといふべからず、一出<sup>レ</sup>不出といふべからず。風火すなはち仮性といふべからず。ゆへに長沙は、蚯蚓に有仮性といはず、蚯蚓無仮性といはず、ただ莫妄想と道取す〕」。これは「仮性」にも相当し、「風火」にも相当しているのである。また、「仮性」と「風火」

イハス、タタ莫妄想ト道取ス、是ハ仏性ニモアタリ風火ニモアタリタル也、又仏性与風火ヲニキテ俱出ストモイハシ、又仏性ハ出、風火ハ不出トモイハス、(一四一-b) 只風火未散トハ、仏性ノ道理ノヒヒク所カイハルル也ト可ニ心得、風火共ニ仏性ナリ、仏性ノ上散未散ノ詞ヲツケテ可ニ心得也、以ニ此道理、長沙ハ蚯蚓有仏性トモ、蚯蚓無仏性トモ不云、只莫妄想トハ被<sup>レ</sup>答也、只仏性ハ仏性也ト云程ノタケナリ、此道理カ風火未散ハ仏法ヲトキ、未散風火ハ法仏ヲトク程ノ道理ニアタルナリ、

\仏性ハ生ノ時ノミアリテ、死ノ時ハナカルヘシト思、尤少聞薄解也云云、(一四二-a)

俱動ノ時ハ仏性アリ、不<sup>ニ</sup>俱動<sup>一</sup>時ハ仏性不可<sup>レ</sup>有ト打任テハ心得ヌヘシ、是ヲ被<sup>レ</sup>嫌ナリ、生死俱仏性也、生也全機現、死也全機現ノ生死ナルユヘニ、共仏性ナリ、

「又、仏性は生のときのみ「に」ありて、死のときはなかるべしとおもふ、もとも少聞薄解なり」とある。

「俱動」のときは仏性があり、俱動しないときは仏性はあるはずがないと、普通一般には理解できよう。これを斥けられるのである。生死ともに仏性である。生也全機現、死也全機現の生死であるから、「生のときも死のときも」とともに仏性である。

\仏性ハ動不動ニヨリテ在不在シ、識不識ニヨリテ神不神ト○乃至邪執<sup>シヤウツ</sup>セルハ外道也云云、如前云、動スルハ仏性有ルヘシ、不動ニハ仏性ナシ、識ノ時ハ仏性アリ、不<sup>シキ</sup>ニハ仏性ナシ、如<sup>レ</sup>此ノ見解ヲ外道也トハ被<sup>レ</sup>仰也、動られるのである。動・不動、在・不在、「識・不識、神・不神、知・不知、性・

を二つおいて、「俱出す」とも言わない。また、「仏性」は「出」、「風火」は「不出」とも言わない。ただ「風火未散」とは、仏性の道理の及ぶところが言わるのであると理解すべきである。風も火もともに仏性である。仏性である上で散・未散のことばをつけて理解すべきである。この道理によつて、長沙は「蚯蚓有仏性」とも「蚯蚓無仏性」とも言わず、ただ「莫妄想」と答えられたのである。ただ仏性は仏性であるということである。この道理が「風火未散はほとけ法をと」<sup>(13)</sup>き、「未散風火は法ほとけをとく」ほどの道理にあたるのである。

不動、在不在○乃至共仏性ナルユヘニ、(一四

二-b)

仏性ヲ道取スルニ、**挖泥滯水**ナルヘキニアラ  
サレトモ、牆壁瓦礫也、向上ニ道取スルト  
キ、作麼生ナラムカコレ仏性文、**挖泥滯水**ト  
ハ、和光利物ナント云心地也、所詮クワシク  
ネムコロナル心地歟、又仏性ノ道理牆壁瓦礫  
トモイハムト云心地也、作麼生ナラムカコレ  
仏性ト云フ心地ハ、仏性ヲ道取スル時ハイカ  
ナルモ皆仏性也、仏性ナラヌ一塵ノ法アルヘ

カラスト云也、更非三不審詞、

還委悉麼、三頭八臂文、(一三四 a)猶仏性ヲ  
委ク云ハハ、三頭八臂ト云ハムト云心地也、  
仏菩薩ノ形像ノ中ニモ、身ハ一ニテ八臂三  
面、乃至五六面十一十二ナムトアル形像モア  
リ、又千手ハ一身ニ千手千眼具足シ給ヘリ、  
然者仏性ノ道理千変万化スルユヘニ、或悉有  
仏性トモイハレ、或山河大地トモ被説或又  
有仏性、無仏性、或狗子、或蚯蚓、乃至牆壁  
瓦礫トモイハルルナリ、三頭八臂ニ當歟、但  
今ノ形像、形像等ヲ打任テ人ノ思ナラハシタ  
ルニハ可レ異歟、閑可ニ了見、(一四三 b)

不性」ともに仏性であるから。

「仏性を道取するに、**挖泥滯水**なるべきにあらざれども、牆壁瓦礫なり。向上  
に道取するとき、作麼生ならむかこれ仏性」。「**挖泥滯水**」とは、「和光利物」な  
どという意味あいである。結局、くわしく懇ろである意味あいであるのか。また、仏性の道理を「牆壁瓦礫」とも言う意味あいである。「作麼生ならむかこれ  
仏性」という意味あいは、「仏性を道取する」ときは、いかなるも皆仏性である。  
仏性でない一塵の法があるはずがないというのである。決して疑問のことばでは  
ない。<sup>(14)</sup>

「還委悉麼、三頭八臂」。さうに仏性を委しく言うならば、「三頭八臂」と言お  
うという意味あいである。仏・菩薩の形像の中にも、身は一つで八臂三面、或い  
は五・六面、十一・十二「面」などとある形像もある。また、千手「觀音」は、  
一身に千手千眼を具足しておられる。そうであるならば、仏性の道理は千變万化  
するのであるから、或いは「悉有仏性」とも言われ、或いは「山河大地」とも説  
かれ、或いはまた「有仏性」「無仏性」、或いは「狗子」、或いは「蚯蚓」乃至「牆  
壁瓦礫」とも言われるのである。「それが」「三頭八臂」に当たるか。ただし、こ  
の形像は、形像等を普通一般に人がいつも思っているのとは異なるはずか。しづ  
かに考えよ。

無念寂靜ヲ仏性ト云事アリ、コレ教ノ一方ノ

\<sup>(15)</sup>

道理ヲキクトキ如レ此、世間ノ詞ニテ見ハ、

今ノ蚯蚓ノ段無<sup>ノ</sup>正躰<sup>ノ</sup>、不可<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>仏性<sup>一</sup>、

切ト云詞ニ付テハ、葛藤ノ根源ヲキルト云

フ、人未<sup>シ</sup>識<sup>ノ</sup>詞アリ、

第一義諦アヤマレハ第一諦ニ落ツ、月ニ第

一月<sup>天月也、不<sup>レ</sup>錯<sup>ヲ</sup></sup>、第二月<sup>眼ニ病アル月ナリ、</sup>水ニヤトル月、天

月第一月、第二水中月トタツレトモ、此義

不然、モトヨリ虚実<sup>ヨシツ</sup>ニカカハラス、第一月

ノヲハリニ第二月ナシ、第十一月ノハシメニ

（二四四a）第一月ナシ、一ト可<sup>レ</sup>明、

蚯蚓ハ如<sup>レ</sup>詞モアリヌヘシ、但仏地ハ可<sup>レ</sup>動乎

可<sup>レ</sup>切哉、三界切テ為<sup>ニ</sup>兩段<sup>一</sup>一心在<sup>ニ</sup>何方<sup>一</sup>、

尽界切為<sup>ニ</sup>兩段<sup>一</sup>ト云フ詞有哉、

斬タル方ハ千万ニモアレ、コレヲ一頭ニシ

テ、未斬仏向上仏性ヲ一頭トスルカ、

私云、未斬時ハ一段ナリト決定スルコトノ不

恁麼ナルハ、未斬時ノ兩段、斬時ノ一段アル

ヘキヲ、未斬時ハタタ一段也ト決定スルユヘ

ナリ、恁麼ナラハスナハチ、未斬時ノ一段

モ、斬時ノ（二四四b）兩段モ、トモニ不恁

麼ナルヘカラス、シカアレハ未斬時ノ一段モ

恁麼不恁麼ナルヘシ、斬時ノ兩段モ恁麼不恁

麼不恁麼ナルヘシ、斬時ノ兩段モ恁麼不恁

る。世間のことばで見るならば、この蚯蚓の段はうまく説き示していない。仏性とすべきではない。

「切る」ということばに關しては、「葛藤の根源をきる」という「人未識」のことばがある。<sup>(16)</sup>

「第一義諦を錯れば第二諦に落ちる。月に第一月へ天の月である。錯らない」、第二月へ眼に病があつて見られする月である。水に宿る月「の場合」、天月は第一月、第二は水中の月とするけれども、この意味はそうではない。もとより虚実にかかわらない。第一月の終りに第二月はない。第二月の初めに第一月はない。一つと知るべきである。

「蚯蚓」は「斬為<sup>ニ</sup>兩段」のことばのようにもあるにちがいない。もっとも、仏地は動くことができるのか。切ることができるとののか。「三界唯一心であるが」三界を切つて兩段としたとき、一心はどちらにあるのか。「尽界を切つて兩段とする」ということばもあるのか。

「斬つた箇所は千万であつてもよい。これを一頭にして、未斬・仏向上・仏性を

一頭<sup>ひとつのも</sup>とするのか。

「私が言う、「未斬時は一段なりと決定する」ことが『不恁麼』（そのようではない）であるのは、未斬時の<sup>二</sup>兩段<sup>一</sup>、斬時の<sup>二</sup>一段<sup>一</sup>があるはずであるのを、『未斬時は』ただ『一段なりと決定する』からである。そのようであるならば、未斬時の<sup>二</sup>一段<sup>一</sup>も、斬時の<sup>二</sup>兩段<sup>一</sup>も、ともに『不恁麼』であるはずがない。そうであるとすると、未斬時の<sup>二</sup>一段<sup>一</sup>も恁麼・不恁麼であろう、斬時の<sup>二</sup>兩段<sup>一</sup>も恁麼・不恁麼であろう」と。

麁ナルヘシ、

蚯蚓モトヨリ一段ニアラスハ、何ソハシメテ  
両段ナラン、ユヘニモトヨリ斬ニアラス、未  
斬ニアラス、

蚯蚓キレテ両段ニアラスハ、サラニ一ノ二ト  
ナルト云ヘカラス、両段何ソ未斬以前ノ蚯蚓  
ニアハサラム、恁麁ナラハスナハチ、蚯蚓イ  
マタキレサルニ両段ト成ト云ヘシ、(二四五

a) 両段トナルトイフハ、夢中説夢<sup>ヤツ</sup>ノ道得ナ  
リ、頭上安頭<sup>シナウアン</sup>ノ参考ナリ、

両頭俱動トイフ両頭ハ、未斬ヨリサキヲ一頭  
トセルカ ○ キレタル両段ハ一頭ニシテ、  
サラニ一頭ノアルカ文、仏向上ノ一頭ハ、蚯  
蚓ノ上ニ置テ仏向上ノ義ヲアラハスヘキナ  
リ、仮性ヲ非動非不動ト云ヘハ、俱動ト談セ  
ムニハ、仮性ノ所在ニ不堪<sup>カシ</sup>ナル也、

私云、両段ヲサシテカナラス両頭ト云ヘキニ  
アラス、ユヘニ俱動ナリ、(二四五b)

両トイフハニニアラス、三ニアラス、未斬時  
ノ両ナルカユヘニ、  
俱トイフハニヲ俱ナラシムルニアラス、一ヲ  
俱ナラシムルニアラス、

寂<sup>シタクシタク</sup>静<sup>シタク</sup>コレ俱ナリ、コノ俱從来ノ旧窯<sup>シウ</sup>ヲ脱落

「蚯蚓もとより一段にあらず」ならば、どうして改めて両段であろう。だから、「もとより」斬ではなく、未斬ではない。

「蚯蚓されて両段にあらず」ならば、決して一つが二つになると言うべきではない。「両段」がどうして未斬以前の蚯蚓に会わないのだろう。そのようであるならば、蚯蚓がまだ斬れないのに「両段」となると言うべきである。「両段」となるというのは、「夢中説夢」の道得である。「頭上安頭<sup>(17)</sup>」の参考である。

「両頭俱動といふ両頭は、未斬よりさきを一頭とせるか、「仏向上を一頭とせ  
るか。両頭の語、たとひ尚書の会不会にかかるべからず。語話をすつことな  
かれ。」されたる両段は一頭にして、さらに一頭のあるか。「仏向上」の「一頭」  
は、蚯蚓の上において「仏向上」の意味を表すべきである。仮性を非動・非不動  
と言ふから、「俱動」と説くときには、「仮性の所在は不堪」である。

「私が言ふ、「『両段』を指して、必ずしも『両頭』と言るべきではない。だから  
『俱動』である」と。

「両」というのは二ではない、三ではない。未斬時の両であるから。

「俱」というのは、二つを俱にさせるのではない。一つを俱にさせるのではない。

スルユヘニ動トイフナリ、

タトヘハ衆生ノ仏ニナルヲ動トイヒ、仏ノ仏ニナルヲ動トイハムカコトシ、

未斬ヨリサキヲ一頭トセルカト云ハ、頭頭コレ分外ニアラサルヲ一頭ト云ナリ、タトヘハ

万法唯一（二四六a）トイハムカコトシ、

仏向上ヲ一頭トセルカトイフハ、上ノ下ニマタレス、下ノ上ニコラサル、コレヲ仏向上

ト云ナリ、コノ理待ニアラス、対ニアラス、コレ向上ノ一頭ナリ、シカレハ未斬ヨリサキ

一頭ト、仏向上ノ一頭トヲナラヘテ、両頭トイハムトニハアラス、タトヒナラヘムトイト

ナムトモナラフヘカラサルカユヘニ、仏道ノ道理ヲモテ斬未斬トモツカフヘシ、一方ニト

ルヘカラス、  
百千ニ斬トモ蚯蚓両段トナルヘカラス、キレス（二四六b）トキ一段ト云事ナキユヘニ両段トイフ、有仏性ノ義ヲ以テ両段トイヒ、無仏性ノ義ヲ以テ両段トイフ義ニテアルナリ、シカレハコレヲナラヘテ二トモ三トモイハルマシキ道理ナリ、

ソノ動トイフニ、俱動トイフ、定動智抜トモニ動ナルヘキナリ、

私云、俱トイ云ハ動ノ全面ナリ、彼此ヲ強為シ

るから「動」というのである。

へ例え、衆生が仏になるのを「動」と言い、仏が仏になるのを「動」と言うようなものである。

へ「未斬よりさきを一頭とせるか」というのは、頭々が格別ではないことを「一頭」というのである。例え、「万法唯一」というようなものである。

へ「仏向上を一頭とせるか」というのは、上が下に待たれない、下が上に残らない、これを「仏向上」というのである。この理は、「上を」待つのではない。「下に」対するのではない。これが「向上」の「一頭」である。そうであるから、「未斬よりさき」の「一頭」と、「仏向上」の「一頭」とを並べて、「両頭」と言おうというのではない。たとえ並べようと努めたとしても、並べることができないのであるから、仏道の道理によって、斬とも未斬とも使うべきである。一方だけにとつてはいけない。

へ百千に斬ったとしても、蚯蚓は「両段」となるはずがない。斬れないとき「一段」と言うことがないのであるから「両段」と言う。有仏性の意味で「両段」と言い、無仏性の意味で「両段」と言うのである。そうであるから、これを並べて二とも三とも言われるはずがない道理である。

へ「その動といふに、俱動といふ、定動智抜ともに動なるべきなり」。

へ私が言う、「『俱』というのは『動』の全面である。あそやこれを、しいて『俱』

テ俱ト云ニアラス、定動ノ動ニアラス、智抜ノ動ト云ニアラス、俱動コレ俱動トイフナリ、

先以<sup>レ</sup>定動、後以<sup>レ</sup>智拔ト云事アリ、凡惱ヲハ（二四七a）定ヲ以テ動シテ、智ヲ以テ拔ト云ナリ、今ハ俱動トイフ、覺不覺トモニ仏法トイフホトノ心ニ、カクノコトクツカフナリ、

両頭ニカキラス、千頭万頭モ動トツカヒ、定ノ所ニモ拔アリ、拔ノ所ニモ動アルヘキナリ、

未審仏性在阿那箇頭、コノ道得ハ審細ニスヘシ、

非一非大非小ト云程ノ事也、

私云、仏性ノ所在トシリカタキニヨリテ、コレヲタツネムカタメニ、未審仏性ト云フニアラス、道得ノ審細ナラムハ、仏性ノ未審ナルヘキカユヘニ、明見（二四七b）仏性コレ未審仏性ナリ、在阿那箇頭トイフハ、仏性ノ面目幾無量ナルヘキソト問フナリ、コレスナハチ不知ノ問ニアラス、疑滯<sup>ヤタイ</sup>ノ問ニアラス、ユヘニコノ道得ハ審細ニスヘシトイフ、

仏性斬為両段〇文、

と言うのではない。『定動』の『動』ではない。『智抜』が『動』というのではない。『俱動』が『俱動』であるというのである」と。

「先ず「定」で「動」かして、後に「智」で「抜」くということがある。煩惱を「定」で「動」かして、「智」で「抜」くというのである。ここでは「俱動」とある。覺・不覺がともに仏法であるというほどの意味に、このように使うのである。

「『両頭』に限らない。千頭万頭も「動」と使い、「定」のところにも「抜」があり、「抜」のところにも「動」があるはずである。

「未審、仏性在阿那箇頭、……この道得は審細にすべし」。

「非一・非大・非小」というほどのことである。

「私が言う、「『仏性の所在』として知ることが難しいから、これをたずねるためには『未審、仏性「在阿那箇頭」』と言<sup>じよば</sup>うのではない。『道得』が『未審』であるのは、『仏性』が『未審』であるはずであるから、明見仏性が『審細仏性』である。『阿那箇頭』というのは、仏性の面目はどれほど無量であろうかと問うのである。これは知らないくて問うのではない。疑滯の問ではない。だから『この道得は審細にすべし』という」と。

「仏性斬為両段……」。

コノ仏性ヲ談スル事十四段ナリ、仏性斬テ十四段トモ云フヘキ歟、凡仏法ヲ談セムニ、仏性ヲ審細ニ沙汰セムホカ、又不可<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>別儀哉、真如トイフモ実相トイフモ仏性ナルヘシ、七十五帖ノ今ノ草子、正法眼藏ハタタコノ（二四八a）仏性ノミナルヘシ、

仏性ノ審細ノ一分ヲ拳スルトキ、仏性斬為兩段、未審蚯蚓在阿那箇頭トイフヘシトナリ、<sup>(18)</sup>仏性斬為兩段ハ、仏与<sup>レ</sup>性斬テ為<sup>ニ</sup>兩段<sup>一ト</sup>トイフカ仏之<sup>レ</sup>与<sup>レ</sup>性達此達彼ノユヘニ、尚書ノ道得ハ蚯蚓為兩段ナリ、

先師ノ指示ハ仏性斬為兩段ナリ、蚯蚓斬為兩段ハ見聞邪正ニワタル、仏性斬為兩段ハ相伝古今ヲ超過ス、又尚書ノ道得ハ（二四八b）未審仏性在阿那箇頭、先師ノ指示ハ未審蚯蚓在阿那箇頭、尚書ノ道得ハ所在ノ知不知ニタリ、

先師ノ指示ハ蚯蚓ノ未審、仏性ノ未審ニ超越スル事ヲ拳揚ス、イマカサネタル審細ノ小許ヲ<sup>レ</sup>拳セハ、<sup>レ</sup>道仏性斬為兩段、<sup>スコジョウ</sup>未審仏性阿那箇頭、蚯蚓斬為兩段、未審、蚯蚓在阿那箇頭、

イフカシ、仏性阿那箇頭ニカナキトイハマホ<sup>無</sup>

「この仏性を説くのは「仏性の卷では」十四段である。仏性を斬つて十四段とも言うべきか。大体、仏法を説くのに、仏性をことこまかにとりあげて論議するほかに、また別のことがあるはずがないではないか。真如というのも、実相といいうのも仏性であろう。七十五帖のこの草子、『正法眼藏』は、ただこの仏性のみ「を説いていると言つてよい」であろう。

「仏性の「審細」の一分を挙げるとき、「仏性斬為兩段、未審、蚯蚓在阿那箇頭」といふべし」というのである。

「仏性斬為兩段」は、「仏と性とを斬つて兩段と為す」というのか。「仏之<sup>レ</sup>性、達此達彼<sup>(19)</sup>」であるから。尚書の道得は「蚯蚓斬為兩段」である。

先師「道元和尚」の指示は、「仏性斬為兩段」である。「蚯蚓斬為兩段」は、見聞邪正につながる。「仏性斬為兩段」は、相伝古今を超える。また、尚書の道得は「未審、仏性在阿那箇頭」。先師の指示は「未審、蚯蚓在阿那箇頭」。尚書の道得は、「仏性の」「所在」を知っているか、知らないかをたずねているように見える。

「〔未審、仏性在阿那箇頭〕に対する」先師の指示は、「仏性斬為兩段、未審、蚯蚓在阿那箇頭といふべし」とあって、」蚯蚓の未審は、仏性の未審に超越することを拳揚する。いま更に加えた「審細」の少しばかり拳せば、次のように言るべきである。「仏性斬為兩段、未審、仏性在阿那箇頭。蚯蚓斬為兩段、未審、蚯蚓在阿那箇頭」。

「知りたい、仏性はどうちの方にないと言いたいのか。何も仏性でないものはな

シ、ナニモ仏性ナラヌモノナキユヘニ、(一)

いのであるから。

四九a)

両頭俱ニ動、仏性在阿那箇頭○仏性ノ所在ニ不堪也トイフカ、不動不退ハ仏性ナリ、

私云、仏性モトヨリ非有非無、非動非靜、ユヘニ動処<sup>シヨウ</sup>仏性ノ所在ナルヘカラス、所在モシ動ナラハ、仏性モ動ナルヘキカユヘニ、仏性ノ所在動ナルヘカラス、コノユヘニ俱動ナラハ、仏性ノ所在ニ不堪ナルヘキカトハアルナリ、

モシ俱動ナラハ、仏性イツレノ所ニカアル、モシ仏性ナラハ、イツレノトコロニアリテカ俱動ナル、(二四九b)

俱動ナレハ、動ハトモニ動ストイフトモ、仏性ノ所在ハ、ソノ中ニイツレナルヘキソトイフカ、

私曰、動世界ノ俱ニ玲瓈ナル、イツレノ所カ俱動ナラサラム、カクノコトク尋ヌル所ニ、仏性ノ能所玲瓈ナリ、蚯蚓ノ斬動不昧ナリ、ユヘニソノ中ニイツレナルヘキソトイフカト云ハ、是什麼物恁麼來ノ道得ナリ、説以一物即不中ノ詞ヲマツヘカラス、

師曰、莫妄想、コノ宗旨ハ、作麼生ナルヘキ

ヘ「両頭俱動、仏性在阿那箇頭「といふは、俱動ならば」、仏性の所在に不堪なりといふか」。不動・不退は仏性である。

ヘ「私が言う、「仏性はもとより非有非無、非動非靜「である」。だから動くところが『仏性の所在』であるはずがない。『所在』がもし動ならば、仏性も動であるはずであるから、『仏性の所在』が動であるはずがない。このゆえに、『俱動ならば、仏性の所在に不堪』であろうかとあるのである」と。

ヘ「もし「俱動」であるならば、仏性はどちらにあるのか。もし仏性であるならば、どちらにあって「俱動」なのか。

ヘ「俱動なれば、動はともに動ずといふとも、仏性の所在は、そのなかにいづれなるべきぞといふか」。

ヘ「私が言う、「『動の世界が俱に玲瓈である。どこが俱動でないであろう。』このように尋ねるところに、仏性の能所が玲瓈である。蚯蚓の斬・動はくらまさないのである。だから、『そのなかにいづれなるべきぞといふか』というのは、「そのうちのどちらをもと「うことであり、』『是什麼物恁麼來』の道得である。<sup>(20)</sup>『説似一物即不中』のことばを待つべきではない」と。

ソ文、莫妄想ト云詞、両頭ニモ不<sup>レ</sup>付、又仏性ニモ（二五〇a）不<sup>レ</sup>付、タタ妄想ト云コトアルヘシト心得也、タトヘハ実相ヲ実相トイフ程ノ事ナリ、諸法ヲ実相ト云ニアラス、

\云、イフココロハ、莫妄想ノ詞ヲフタタヒ

挙揚ス、作麼生ノ宗旨ハ莫妄想ナルヘキカユ

ヘニ、妄想スル事ナカレト云フナリ、

\云、妄想スル事ナカレトイフ、コレ莫妄想ヲ莫妄想ト道得スル也、

\云、莫妄想ヲ<sup>タタヒ</sup>回避スル両頭ナシ、俱動ナ

シ、仏性ナシ、タタ仏性ハ妄想ナシトイフ

カ、（二五〇b）

莫妄想ト云ハ説似一物トイフ同事ナリ、

\スルハイカカセムト云ハ、動スレハサラニ  
仏性一枚ヲカサヌヘシト道取スルカ、動スレ  
ハ仏性ニアラサムト道著スルカ、

\云、動スレハサラニ仏性一枚ヲカサヌトイ  
フ一枚ハ、動ノホカニ仏性一枚ト云ニアラ  
ス、仏性一枚ナレハ動モ一枚ナルヘシトナ  
リ、ソノユヘハ動ニ動ヲカサネムヲ仏性ノ一  
枚トイヒ、一枚ニ一枚ヲ<sup>タタヒ</sup>減セムヲ動ノ俱ト云  
ヘキカユヘニ、動取半枚ヤフレハ仏性ノ一枚  
ヤフルヘシトナリ、（二五一a）

莫れ）ということばは、「両頭」にも関係ない。また「仏性」にも関係ない。ただ「莫妄想」ということがあるはずであると理解するのである。例えば、実相を実相と言うほどのことである。諸法を実相と言うのではない。

「私が言う、「そのわけは、『莫妄想』のことばを再び挙揚する。『作麼生』の『宗旨』は『莫妄想』であろうから、『妄想することなけれといふなり』」と。

「私が言う、「『妄想することなけれ』というのは、『莫妄想』を『莫妄想』と道得するのである」と。

「私が言う、「『莫妄想』を回避する『両頭』はない。『俱動』はない。『仏性』はない。『ただ仏性は妄想なしといふか』『である』」と。

「『莫妄想』というのは、「説似一物「即不中」」というのと同じことである。

「動ずるはいかがせむといふは、動ずればさらに仏性一枚をかさぬべしと道取するか、動すれば仏性にあらざらむと道著するか」。

「私が言う、「『動すればさらに仏性一枚をかさぬ』という『一枚』は、『動』のほかに『仏性』を『一枚』というのではない。『仏性一枚』であるから、『動』も『一枚』であろうというのである。そのわけは、『動』に『動』を重ねるのを『仏性』の『一枚』と言い、『一枚』に『一枚』を減らすのを、『動』の『俱』と言るべきであるから、『動取』の半枚を破るならば、『仏性』の『一枚』を破るべきであるというのである」と。

\風火未散トイフハ、仮性ヲ出現セシムルナル  
ヘシ、○ 風火スナハチ仮性トイフヘカラス  
云々、三界常住不壞世間法ト云フモ未散ナリ、  
仮法未散トモイフヘシ、仮性切テト云様ニ、  
未散モ散モトリカヘテ心得ヘシ、

\私云、ヲホヨソ仮性ノ体相イカナルヘシトシ  
ラサルウヘハ、有情ニアリ非情ニ有ト云フ詞  
ノミアリテ、イマタソノ面目ヲシラサルカコ  
トシ、詞ニヨリテ理ヲアキラメサルトキハ、  
理ニマトフノミニモアラス、語ニモ迷ナリ、  
仮性ヲ（二五一-b）仮性ト開演スレトモ、詞  
ノミアリテ実ナシ、仮性ノ親切ニ開演セラル  
ルトキハ、風火未散トキコユ、

\風火未散トイフハ、風火イマタ散セストイフ  
ニハアラス、風火ノ始終ヲトクコトハナリ、  
風性常住無所不周ノ道理ナリ、ソノユヘハ始  
終未散ナルコトヲ風火トイフ、風火ノ始終ハ  
仮性ノ始終ナルユヘニ、散ニアラス未散ニア  
ラス、コレヲ仮性トイフ、出ニアラス現ニア  
ラサルコレヲ仮性トイフ、未散ノ風火ニ出現  
(二五一-a) スルコトヲ風火トイフ、風火ノ  
未散ニ出現スルコレヲ仮性トイフ、ユヘニ仮  
性ナリトヤセム、仮性ト風火ト、俱出すトイ  
ストイ

へ「風火未散といふは、仮性を出現せしむるなるべし。「仮性なりとやせむ、風  
火なりとやせむ。仮性と風火と、俱出すといふべからず、一出一不出といふべか  
らず。」風火すなはち仮性といふべからず」とある。「三界常住不壞世間法」とい  
うのも「未散」である。「風火未散」を」「仮法未散」ともいうべきである。「蚯  
蚓斬」を」「仮性斬」というように、未散も散も取り替えて理解すべきである。

「私が言う、「大体、仮性の本体と特質はどのようなものであるべきかということ  
を知らないからには、「仮性は」有情にある、「或いは」非情にあるということば  
だけがあつて、まだその本来のすがたを知らないようなものである。ことばによ  
つて理をはつきりと知らないときは、理に迷うだけでもない、ことばにも迷うの  
である。仮性を仮性と説き明かすけれども、ことばだけがあつて実がない。仮性  
が適切に説き明かされるときは、『風火未散』と受け取られる」と。

「「風火未散」というのは、風火がまだ散じていないというのではない。風火の  
すべてを説くことばである。「現成公按の巻に説かれた」「風性常住無所不周」の  
道理である。そのわけは、すべて「未散」であることを「風火」と言う。「風火」  
のすべては仮性のすべてであるから、散ではない、未散ではない。これを仮性と  
言う。「出」ではない、「現」ではないことを仮性と言う。未散の風火として出現  
することを風火と言う。風火が未散によって出現することを仮性と言う。だか  
ら、「仮性なりとやせむ、「風火なりとやせむ」仮性と風火と、俱出すといふべか  
らず、一出一不出といふべからず。風火すなはち仮性といふべからず」という指  
示があるのである。

フヘカラス、一出一不出トイフヘカラス、風火スナハチ仮性トイフヘカラストイフ指示アルナリ、

ユヘニ長沙ハ、蚯蚓ニ有仮性トイハス、蚯蚓ニ無仮性トイハス、

私云、有無ノ両段ハ蚯蚓ノ一頭也、仮性ノ俱動ナリ、ユヘニ有仮性也、不<sup>レ</sup>道<sup>二</sup>無仮性<sup>一</sup>也、不<sup>レ</sup>道<sup>二</sup>両段<sup>一</sup>也、不<sup>レ</sup>道<sup>二</sup>俱動<sup>一</sup>也、不<sup>レ</sup>道<sup>二</sup>不<sup>レ</sup>道<sup>一</sup>又不<sup>レ</sup>道、(二五一)b)

タタ莫妄想ト道取ス、風火未散ト道取ス、

私云、タトヒ斬テ有無ノ両段トナルトイフトモ、イマタノカレス、莫妄想ノ道取トナルコトヲ、ユヘニ有無ノ両段ハ、サモアハアレ、仮性ハ斬未斬ニアラサル、コレ風火未散ノ道取ナリ、

「私が言う、「たとい〔蚯蚓を〕斬つて、「一方は」有、「他方は」無の、両段<sup>二</sup>となると言つても、まだ「莫妄想」の道取となることを逃れない。だから、有無の両段は、それはまあそれとして、仮性は斬・未斬ではない。『風火未散』の『道取』である」と。

「ただ莫妄想と道取す、風火未散と道取す」。

「少聞薄解」の者は、生のときには仮性があつて、死のときには仮性はないと言ふが、今、死をも加えて、死のときも仮性があると理解するのは邪見である。この道理では、生のときの仮性も当らない。仮性には全く生死をたてない。そうであるから、どうして生死があるであろう。ただ仮性を生と使い、仮性を死と使ふ。コノ義ニテハ生ノトキノ仮性モアタラス、仮性ニハスヘテ生死ヲタテス、シカレハナニ(二五三a)トシテカ生死アルヘキ、タタ仮性ヲ生トツカヒ、仮性ヲ死トツカフ、トモニハカリナシ、ユヘニ生ノトキモ有仮性アリ

無仏性アリ、死ノトキモ有仏性アリ無仏性アリトツカフ、如レ此、

拵泥滯水ト云ハ、和光利物トイフ同事ナリ、  
向上ニ道取スルトイフハ、仏ヲ仏トトクナ  
リ、衆生ヲ仏トイフニハアラス、

\作麿生ナラムコレ仏性、還委悉麿、三頭八臂  
トイフハ、ヤカテイカナルカコレ仏性トイフ  
事ヲノヘタルナリ、イカナラムト云ハ（二五  
三b）三頭八臂ナリ、一頭一臂トモサタメサ  
ルユヘニ、又三頭八臂ハタタ無量頭無量臂ナ  
リ、仏性ノ面ニナリテ臂トモカシラトモイハ  
ルルナリ、所詮三頭八臂ハ仏性ノ道理ヲ面々  
ニトク義ナリ、

仏性ヲ談スルニ、蚯蚓トヨヒイタシテ、斬不  
斬、一段両段、動不動、莫妄想、風火未散ナ  
ントアルコトハヲ、三頭八臂トイフナリト  
可ニ心得、トリワキ三頭八臂カ大切ナルニテ  
ハナシ、（二五四a）

「「作麿生ならむ」「か」これ仏性、還委悉麿。三頭八臂」というのは、まさに、「いかなるかこれ仏性」（作麿生是仏性）ということを述べたのである。「いかならむ」というのは「三頭八臂」である。<sup>(21)</sup>一頭一臂とも定めないから。「だから、「いかならむ」とは、「いかなるも」の意味である。」また、「三頭八臂」は、ただ無量頭無量臂である。仏性という顔になって、臂とも頭とも言われる所以である。結局、「三頭八臂」は仏性の道理を、それぞれに説く意味である。

「仏性を説くために、「蚯蚓」を呼び出して斬・不斬、一段・両段、動・不動、  
莫妄想、風火未散などとあることばを、「三頭八臂」というのであると理解すべ  
きである。特に「三頭八臂」が大切であるのではない。

<sup>(22)</sup>金翅鳥非ニ生龍者不<sub>レ</sub>食、補處菩薩非ニ都率一  
者不<sub>レ</sub>生、

金翅鳥は生きた龍でなければ食べない。補處の菩薩は都率天でなければ生まれな  
い。

出家之後神社所作<sup>ニ</sup>法施<sup>ハ</sup>無<sub>レ</sub>憚、或致<sup>ニ</sup>礼拝

奉敬一事不可<sub>レ</sub>然事也、

日月星宿ノ祈祷ハ仏弟子ノ非法也、

ることは差し控えるべきである。<sup>(23)</sup>

日月星宿の祈祷は、仏弟子が行なつてはいけないことである。

鴉ヲ飼ニ、五百年之後習レ舞、千年之後頂

鴉を飼うと、五百年の後には舞を習い、千年の後には頂の毛がかわる。

毛改云云、(一五四b)

(1) 『正法眼藏三百則』卷上、第一〇則。

長沙和尚、因<sub>レ</sub>尚書問、蚯蚓斬為<sub>レ</sub>兩段、兩頭俱動、未審、仏性在<sub>レ</sub>阿那箇頭<sub>レ</sub>、師云、莫妄想。書云、爭<sub>レ</sub>奈動<sub>レ</sub>何。師云、會、即風火未散。書無對。師卻喚<sub>レ</sub>尚書、書應諾。師云、不<sub>レ</sub>是尚書本命<sub>レ</sub>也。書云、可<sub>レ</sub>離<sub>レ</sub>卻即今祇<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>第二箇主人公<sub>レ</sub>也。師云、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>喚<sub>レ</sub>尚書<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>今上<sub>レ</sub>也。書云、與<sub>レ</sub>麼則總不<sub>レ</sub>祇<sub>レ</sub>對和尚、莫<sub>レ</sub>是弟子主人公<sub>レ</sub>否。師云、非<sub>レ</sub>但祇<sub>レ</sub>對<sub>レ</sub>不祇<sub>レ</sub>對老僧、從<sub>レ</sub>無始劫<sub>レ</sub>來、是生死根本。乃示<sub>レ</sub>頌云、學道之人不<sub>レ</sub>識<sub>レ</sub>真、祇<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>從前認<sub>レ</sub>識神、無始劫來生死本、癡人喚<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>本來身。(『全集』下・一〇四頁)<sup>\*</sup>成高寺本へ入<sub>レ</sub>作ル。

この則は『宗門統要集』卷四(一七b)～(一八a)にもある。

(2) 『大般涅槃經』卷三一、師子吼菩薩品第一一之五。

如<sub>レ</sub>拔<sub>レ</sub>堅木、先以<sub>レ</sub>手動後則易<sub>レ</sub>出。菩薩定慧亦復如<sub>レ</sub>是。先以<sub>レ</sub>定動後以<sub>レ</sub>智拔。(正藏一二・五四八b)

(3) 『全集』は「看」とするが、『抄』(一四一a)『聞書』(一五一a)によつて「著」に改めた。

(4) 『全集』『抄』(一四一b)は「蚯蚓無仏性」とするが、『聞書』(一五二b)は「蚯蚓に無仏性」とする。これは、書写の時に、この前にある「蚯蚓に有仏性といはず」に影響されたものであろう。

(5) 「……ほとけ法をとく、……法ほとけをとく」は圓悟の語。『圓悟佛果禪師語錄』卷一九(正藏四七・八〇二b～c)を『正法眼藏』行仏威儀の巻では引用し、次のように説いている。

圓悟禪師云、將謂猴白、更有<sub>レ</sub>猴黑。亘換投機、神出鬼沒。烈焰亘天<sub>レ</sub>仏說<sub>レ</sub>法、亘天烈焰<sub>レ</sub>法說<sub>レ</sub>仏。風前剪断葛藤窠、一言勘破維摩詰。(『全集』上・五四頁)

いはゆる、烈焰亘天はほとけ法をとなり、亘天烈焰は法ほとけをとなり。(中略)葛藤窠の風前に剪断する亘天のみあり。一言は、かくることなく勘破しきたる、維摩詰をも非維摩詰をも。(同・五七頁)

(6) 『維摩詰所説經』卷上、仏国品第一。

仏以ニ一音演説法、衆生隨類各得解。(正藏一四・五三八a)

(7) 『抄』(一一四一-a)は「に」を欠くが、改めなかつた。

(8) 注(1)長沙景岑の頌を参照。

(9) 「蚯蚓歟」とあるが、ここは本文の引用であるから、「仏性」ではなく「蚯蚓」の方が正しい。訳ではそのように改めた。

(10) 第十三段の注(7)と同じく、「白見」は「僻見」の誤りであろうか。本文は改めなかつたが、訳では「僻見」として訳した。

(11) 諸惡莫作の巻では、「諸惡莫作」を「諸の惡を作すことなけれ」とは解さないで、「諸惡は莫作なり」と、次のように述べている。

諸惡は一條にかつて莫作なりけると現成するなり。(中略)諸惡なきにあらず、莫作なるのみなり。諸惡あるにあらず、莫作なるのみなり。諸惡は空にあらず、莫作なり。諸惡は色にあらず、莫作なり。諸惡は莫作にあらず、莫作なるのみなり。(『全集』上・二七九頁)

(12) 摂稿「『御抄』の『正法眼藏』解釈—疑問詞と疑問の助詞について」(『駒沢大学仏教学部論集』第八号、一九七七年一〇月、一七一頁)参照。

(13) 摂稿「『御抄』の『正法眼藏』解釈—打返の表現について」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』第三六号、一九七八年三月、二一九頁)参照。

(14) 注(12)摂稿(一六六～一六七頁)参照。

(15) この前までが『抄』で、ここからが『聞書』である。

(16) 『正法眼藏』葛藤の巻。

おほよそ諸聖ともに葛藤の根源を截断する参考に趣向するといへども、葛藤をもて葛藤をきるを截断といふと参考せず、葛藤をもて葛藤をまつぶとしらす。(『全集』上・三三一頁)

『正法眼藏』仏性の巻、第一段。

尽界はすべて客塵なし、直下さらに第二人あらず、直截根源人未識、忙業識幾時休なるがゆへに。(『全集』上・一五頁)

なお、「直截……幾時休」の語句は、圓悟のことばである(『圓悟佛果禪師語錄』卷七、正藏四七・七四四b)。

(17) 『正法眼藏』夢中説夢の巻。

いはゆる頭上安頭といふ、その頭は、すなはち百草頭なり、千種頭なり、万般頭なり、通身頭なり、全世界不僧藏頭なり、尽十方界頭なり。一句合頭なり、百尺竿頭なり。安も上も頭頭なると参すべし、究すべし。しかあればすなはち、一切諸仏及諸仏阿耨多羅

三藐三菩提、皆從此経出も、頭上安頭しきたれる夢中説夢なり。（『全集』上・二四一〔頁〕）

(18) 「ト」は不用、削除すべきであろう。

(19) 「仏之与性、達彼達此」については、拙稿「『正法眼藏抄』口語訳の試み—仏性(ト)—」（『駒沢大学仏教学部論集』第一五号、一九八四年一〇月、一八六頁）の『聞書』訳参照。

(20) 前掲注(12)拙稿（一六四～一六六頁）参照。

(21) 拙稿「『御抄』の『正法眼藏』解釈—数量表現について—」（『駒沢大学仏教学部論集』第九号、一九七八年一一月、一八九～一九〇頁）参照。

(22) 以下は『正法眼藏抄』第三巻の末尾にある識語。

(23) この識語が、いつ何人によって書かれたのかは不詳であるが、「外道の制多に帰依することなれ」（帰依仏法僧宝）という道元禪師の教えが受け継がれている点に注意すべきであろう。

（一九九〇年度駒沢大学特別研究共同研究費による研究成果の一部）

〔訂正〕拙稿「『正法眼藏抄』口語訳の試み—仏性(ト)—」（『駒沢大学仏教学部論集』第二一号、一九九〇年一〇月）一八五～一八六頁の註（8）において眉山本に「ト云文ヲロウ」とあるのを、「ト云文ヲローウ」とし、「ト云文ヲロウ」と読んだが、「ロ」は「ホ」の古用仮名字であるから（『永平正法眼藏蒐書大成』一一・凡例四頁）、「ト云文ヲホウ」と読むべきであった。「ロウ」は龐蘊居士の「龐」を仮名で表記したものである点については誤りではない。

（一九九一・一・一〇）